# 海外語学研修体験記

## ―フランス　アヴィニョン大学―

吉澤　和史

今回、一連のフランスにおける研修は、私にとって良いことも悪いこともありました。それらをひっくるめて、今後の糧になる素晴らしい経験を積むことができました。

フランスには、2 月 21 日から 3 月 18 日まで滞在していました。そのうち、約 3 週間は南部の都市アヴィニョンに滞在していました。私は、現地にあるアヴィニョン大学でフランス語を勉強していました。このときは、2 年生と 1 年生のクラスに分かれました。私は、1 年生クラスで教員のもとでプリントを使ったり、生徒が互いに会話の練習をしたりしました。時には、その教員のお嬢さんが登場して私たちにレクチャーする機会もありました。最初は、四苦八苦しましたが、朝から晩までフランス語を聞いていたので少しずつ相手の言っていることが理解できるようになりました。そして、多少話せるようにもなりました。また、最後の方では、現地の小学校を訪問して折り紙を教えました。

休日は、引率の教員や他の仲間とフランス南部地方の各所を巡ってきました。その時は、マルセイユの街や、古代のガール水道橋やニームにある闘技場、さらにはユゼスの市場などに行きました。そこでは、多くのフランス文化に接することができると同時に、現地の歴史や雰囲気を味わうことができます。

さらに、忘れてはいけないのが、ホームステイ先での出来事です。私は、御両親と娘さん 2 人の 4 人家族の一家にホームステイしました。彼らは、初めて私と会った時から親切に接してくれました。そして、一家と団らんしたり、けん玉や折り紙、書道、将棋などの日本文化を紹介したり、一家もフランスの様々な習慣や風習を教えてくれました。

私がこの研修で得たことは、普段体験できないことをたくさん行ったことです。つまり、海外で生活すること、現地の大学に通ってフランス語を勉強すること、さらにはフランスの街に住んで外国の空気に触れてきたことです。一つ一つ挙げたらきりがありません。そして、特に住み慣れた日本の地を離れて母国語が全く通じない環境でコミュニケーションを図ることのむずかしさを思い知らされたことです。これは、宝探しのような感覚です。フランス語という名の宝物を探しながら、前に進み続けて理想の地に近づいていくようなものです。私は、おぼろげながら覚えていたフランス語をホームステイ先の家族や現地のフランス人に対して話したり、日本から持ち込んだ仏和・和仏辞典、教科書さらには、スマートフォンの翻訳機能を駆使したりしてなんとか意思の疎通をしていました。また、苦し紛れに英語を使うことも少なくありませんでした。しかし、この厳しい体験は今となってはいい思い出になっただけではなく、自分にとって自信がつきました。それは、ほんの小さな出来事かもしれませんが、自分にとっては大きな出来事になりました。これら一連の出来事は、今後の人生にも多少なりとも影響を与え得るものになったと確信しています。